

23し てま近附山金

船中の假參謀部

歩三三ノ田 歩兵(軍曹) 美原実全

艦隊相軸して洋上を壓す

ヤながら日露の海戦を思はせるやうな壯観でありませう

船中で中隊長殿より今後の作戦に對する諸注意があり、こゝで初めて「アタック」といふことを聞き、いろいろ想像してゐました

一日二日と、船中生活にみんな馴れてくると呑気なものです 出征以來三四ヶ月目――

そろそろ故郷がなつかしくなる頃でした

船中には何時の間にか無邪気な參謀部が設けられ、掛けられた地圖がみんなの評議の的、何よりも興味をひいてゐます

さしやかは参謀部では 今日も四維針盤片手に船の方向をはかり いやに神経を尖らして居ます

「オイ 東へ進んでゐるぞ」

「ドレ／＼ オー しめた 凱旋だ」

「アイツが喜ぶ事だろうな」

嬉しそうな内地の話に参謀部は至つて賑やかであります

翌朝になると船の方向が変わつてゐます

「夫つ張り戦争だ……」

「そうだよ……今歸つても早過ぎて申訴がないよ」

腕が鳴る 気が勇む 心が躍つてゐる

今度こそお前にも負けないぞ」

意気軒昂たる作戦談に花が咲く——

喜憂両面の面白い言論に明け暮れてゐます

斯くして一週間後 霧の中に杭州湾に陸は

決行されたのであります

船

申

所

感

歩三三ノ一歩兵軍曹 山田辰雄

船中では酒保がありました

相當高かつたやうでしたが 誰もが値段な

んかにかまはず買つて飲ませ 暇に任せ

て他愛ない雑談に賑はつてゐました

明けも海—— 暮れても海……

果しなき海原に 陸の勇士はさかんに陸を

癒しがつてゐます

時折甲板に上つて 潮風を腹一杯吸ひこん

で

「あー まだかな」

と 呟いてゐる者もあります 護衛の くるがねの浮城を望んで は どん

なにも強く思つたかわかりませんでしたが

上

陸

・ 歩三三ノ一 中村伍長

愈々上陸準備です

工兵の発動船に乗つて霧の中を 向岸目指

して進む 誰の顔も異常に緊張してゐます

静寂さがかへつて無気味――

下船と同時に勢さんで飛込んだ

まだ膝まである深さの中で ヒヤリと冷た

さを感じながら只夢中に進みました

歩三三ノ一 酒井准尉

神風が起つて宜かつたといひます

前の夜から吹き出した風に 加へて濃霧は

天然の煙幕を構成して敵陣に流れ行

隠蔽された中で着々と実行されて行つたの

です。これを神風と稱して一同の意気正

に天を衝くの概がありました

私は連絡の爲一足先に上陸しましたが 飛

込んだ所は膠位の深さでしたが、それ以前

後の急進にインキンが出来て困りました

上陸前後

歩三三ノ一 小行中 輜重兵曹 甲佐四藏

石灰社から正定まで行軍で行きました

凱旋気分が皆張り切つて居ました

塘沽で乗船して二日はかり此処に居ました

が 出発して先づ大連につき、そこから朝

鮮半島を東に向つて航行しました

この分なら門司が長崎に着くんだろう

などと言つておりましたが、到頭五島列島までやつて来ました。船員に聞いてみますと、どこに行くか分らんが、兎に角凱旋はやむを得ない。

と云ふのでした。それから急に進路を南にとつて、十一月五日より上陸開始。私達は十一日上陸する事になりました。

此の時は弾を六十箱持つて上りましたが、内火艇が岸より二百米位手前で停り、砲名で弾を堤防まで四百米位擔ぎ、携帶口糧を一日分持つて行きました。

然し後の者は未だ二三日は船の中に残るだらうと聞かされた。家屋もない、外套もない。着のみ着のみで、擔架の上に寝て、種々行つたものを壊してこれでお暖とり。十一日の晩を過し、それから道路まで四百米位の間をこの弾と運び、一名監視に残して徴発

に行きました。初めは難身でも沢山居りましたが、上陸部隊が仲々よいので、其後は居るくまりました。

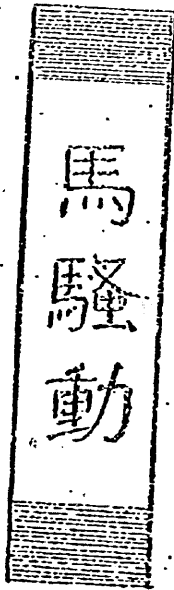
折柄部隊がどんく上陸して来ました。北支で買ひ溜めておいた煙草を、上陸部隊に受取りに行きました。もう死んど彼等が喫つておいたので僅か十三三個しか手に入りませんでした。然しこれで煙草飢饉から救はれた訳です。

もつと面白いのは、後から来た部隊が「お菓がないのですが何かありませんか」とやつて来ました。それで

「豚の肉ならありますよ」と云つて、煮たまま、私達は少しも落さず、けて居ない犬の肉をやりました。

彼等は「仲々美味しい」と云ひ、乍ら皆食つてしまひました。そこで私が「それは犬の肉だ」

と云つたところが 急に嘔吐したり 嘔を吐いたりしておました
 金山でバットを二個先貰ひましたが、二日の程しかありませんでした 集合場どころかの將校の方が煙草を吸つて居られます
 「あれを捨くられたら拾つて来い」と
 兵隊に行つておきました 彼は早速馳つて行つた それを見られれば將校の方は「君達もタバコはないだろう」と一箇下さつた 此の時の気持は 笑に嬉しくありません



歩三三ノ工 小行李 松山一等兵
 杭州湾に上陸した私達は 海岸近くに宿営する事に決りましたので すぐ附近に馬騷

場と云ふへて繋ぎ留しておました
 すると野砲の一軍曹が兵二名従へて参りました そして繋ぎ留してある支那馬を引く
 「此の馬は俺の馬だ」と云つてどうしても聞きません
 種々特徴なんかを押問答してしまふ 不思議な位一致しておます フット特殊な蹄をしてゐるのに気付いた私は
 「蹄に変わったとは何か」
 「いや普通馬と同じだ」
 「此水に自信を帯て勢い込んで私に近づいて来ておいてみせてやりました」
 「此の馬はこんなに蒸蹄だ 違ふだろう」と言ひますが、それでも矢つ張り
 「どうしても此水は俺の隊の馬だ」
 そうして綱を解いて索いて行かうとします その心臓の強さには啞然たろがるを得ません、この暴舉に吃驚し且憤慨した私共は

「お前達が軍曹だからと大きな口幅を利かして、自分達に泥棒の汚名を被せやうとしてゐるが、それでいいのか」
 そう云つて怒鳴りつけますと
 「いや、これはどうも俺の馬の様な」と呟きながらも、結局はその儘にして歸つてしまいました
 えらい騒動もあつたものです

上陸と泥濘

歩三三、砲輜軍 清野道生

輜重兵の仕事は地味であります。それだけに人の知らない隠れた苦勞が多いのです。沃山の兵隊と満載した御用船と護衛の戦艦

て、杭州湾は無気味な空気の中に沈黙を守り、たゞ割合に大きい濁った波が「バタン」
 「バタン」と小なべりをたいてゐるのみです
 十一月五日も明けました。船は皆沖に投錨してゐます。夕刻は上陸らしい――
 波止場がないので兵隊も車輜馬匹も、戦斗材料一切蒸気船に積み替へ上陸せねばならないといふ。兎に角早く土が踏みたい。なにしろ一週間堅苦しい船上の起居だつたからです
 午後六時頃でした
 中隊は愈々上陸――先行の私は大行末の戦友も馬も何も彼も一切船に残して、一人砲隊の兵若干と小舟に乗り移りました
 雨中小魚汽船は猛烈な勢で暴進する
 母船から次第々々に離れて行く……みな顔も蒙根に口許をひきしめてじつと固と睨

んでおます

と、ドシューン、異様な音に動揺して急に止つた。浅瀬らしい。岡まではまだ四五百メートルあります。一將校の「飛込め」の号令一丁ザンブとばかり水中トとびこみました。杭州湾の十一月は相当寒かった。臍まで濡れて水中を進むのです。

ブシューン、流弾一発、無気味な音を立て、目前に落ちて驚かす。もう暗くなつておる。雨はどんく降つておます。退却間際の敵の放火に闇の海面を照らす。滔天に沖して、滔々と物凄い。雨は殺々激しくなつた。火は雨を他所に一層燃へておます。

上陸地の砂上に装具を解き、今夜上陸する。聯隊砲隊の援助をせねばなりません。各部隊共に幾十幾百の小舟で雨の中の闇に上陸しておます。舟上の兵と上陸した兵とが互に自分の隊名を大声で呼び替はつておる。幾

百組、異様な興奮、騒音です。

私共も、三三聯隊の聯隊砲、と紋組にも分水積一杯の力で、二時間余り海岸を右往左往して探しましたがどうしても探

し当りません。諦めて丘に上り若千の連絡兵を残して不潔な家屋に入り、夜の明けるとまで濡れた寒さに一睡もせず中隊の上陸を待ちました。遂に上陸しませんでした。

六日午後吉川中尉殿以下上陸しました。が上陸早々午後三時出発。私共大行李の前進は別命を待つ事になりました。

七日、もう糧食がない。支那米を擦り附近家屋から測り見つけ、缶詰入りの携帯食料で海浜の天幕下の砂上で炊きました。が一度一時間を要しました。要領を得ないので

飯が変な色としておます。臍は非常に空いておます。すぐにかぶりつきました。一ローニロト、三口目に喉を通りません。

一ローニロト、三口目に喉を通りません。

話にならない程苦いのです。その苦附近一帯は塩田だったのでした。

師団大行李長小本大尉殿の指揮により十一月十八日午前十時出発、約二里程前進して金山衛城に到着。村落露宿することになりました。

十九日も雨で同地宿営——

二十日雨の中を出発、金山衛城を過ぎると頼軍車の通るやうな道路は全然ありません。稲の突つた泥濘の田を毎日々々、雨の中にズブ／＼前進するのです。

車輦の半ばは泥田にありこんで鞍馬の蹴掛ける土と泥水に、泥と兵隊のそのまゝで、馱共の頬の皮膚等全然見へない。顔だけで、誰とも区別の出来ない位、動いてゐる目だけが肉体の一部であります。

膝の上までぬかりこんで足の抜けない所もありました。鞆にぶらさがつて行かないと

車輦に轆かかれそうです。畦があらず、ウが横たはうてゐる。馬種は全然ない。行く先で徴発する糧が唯一の馬種でした。僅か一里の前進に一日を要し、一軒の行程に一日を費し、泥に寝て、泥に起きる。

馬は非常に疲れてくる——

狭い長い橋は車輦を介辭して人力搬送をなし、橋のきりりくは、稲こずみの稲を幾

百幾千把積み重ねて車輦を渡しました。

それでも兵の頭には前進あるのみです。何

一つ不服言ふ者なく、全智全能力をあげて

皆最善を盡しました。

毎日のやうに泥まみれになつて、夜おろく

を食小屋にも等しい宿舎に、ついで各目

は決して愛馬のことは忘れないのです。

一葉の柴、一握りの草を、半身綿の如く、

疲れぬても、必ず採り来て愛馬に與へ

るして前進したのです。

自決を覺悟

した者もあつた

歩三ノ工 歩兵軍曹 吉田親善

金山に着くニ里位手前で 丘の頂上に望樓
がありその傍に將校らしい服を着た者が
居ます

「友軍だ」と 日意旗を掲げると 豈圖らん
や一斉射撃です 我が方では後方に退いて
決戦をすることになり すぐ陣地につきま
した

暫くすると喇叭の音がします 前衛には約
四千名位の敵が前進して来ます
「好敵御参上北」とばかり私達も一斉に砲火
を浴せます 何分敵が多いので弾丸は百発
百中 面白い程倒れます

しかし衆を頼んだ敵は雪崩の如く愈々接近
して来ます 友軍には負傷者は出る 弾丸
は致々少くなつて来る
敵が五六十米に接近した時です

指揮班の高島衛生兵(現在軍曹)と 竹本中尉
一等兵(現在軍曹)は 半薙剣を引抜いて刺し
交へて死ぬ」と身構へてゐると 上衛小隊
長殿から叱られました

幹部の協議の結果 最後の「一斉射撃をなし
敵の怯む隙を利用して 後方に退き 道路
を迂回して金山に到着したの日は午後二時頃
でありました

分隊の原田上等兵は 自分の負傷を隠して
克く自己の任務を全うしたのは感心でした

大敵に襲はれた

歩三ノ六 堂間上等兵

十一月六日 杭州灣に上陸して 大隊砲の
掩護に一ヶ分隊残さ水ヨシ

ぬかるみのため道路の通りは前進が出来ず
遅れてしまいましたが 金山迄はどうにか
辿りつきました。しかし水からは道がな
く舟で水路を行くことになりました

「さあこれから舟でぞ」

と言ふ訳じ 支那酒 野菜等を徴発して積
込み一杯気嫌の酔心地で進みました

そうして行くうちに 苦力の側に「日本軍
歓迎」の旗を立てた土民が三三見へます

近づくとすぐ逃げ出したので「それッ」と

小銃分隊は射り出しました。と。その家の

後から武装した十四五名の敵が又逃げます

（この水は潮断が出来んぞ）と思つておますと

向山から將校らしき者が来ます 今逃げた

敵の指揮者でもあつたか 部下が未だお

ものと思ひこんで来るのでせう 奉銃も射

たすやつて来ます

おかしいなと思つておますうち ほんの近

くまで近付らしてはじめてそれと気づき 突

然一散に逃げました 注意してみれば向小

の山には敵の監視兵らしい者がおる そい

つが何やらわめく。この水は何かはじまる

ぞと思つておますと 山の中腹から敵が

大分現れ 私達も田の畦に上りました

暫くして敵の（斉射） それに広じて

敵はラツパを吹き今にも突進してくる気配

を見せておます

そこへ友軍隊が飛来して来て掃射をして

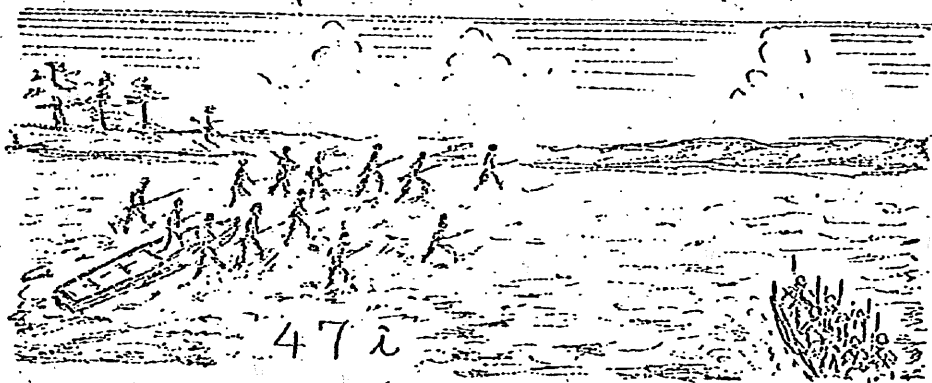
くれましたので一時沈黙しました

約二時間の戦斗に不幸にも二名の犠牲者を

出ました 兵力の少い爲止むを得ず 六時半

頃一旦退き 工兵隊の作る所まで行くこと

に致しました



47

朝霧を衝いて

歩四七、一二 歩兵上等兵 柳井守

青黒く波静かなる海面には、小鳥が幾羽と佇み、水すれ／＼に飛んでおまらした。昭和十二年十月二十六日、我皇軍を乗せた数隻の大型船は、塘沽を後に沖に出た。戦地に來てかう

始めての乗船だったので、一同は只口々に凱旋々々と言つて喜ぶのでした。時の軍司令官は、柳川平助閣下でした。晴れた空には、午後の日が赤々と輝いて、甲板から海面を見下せば、横から差込んで來る日光がキラ／＼とまぶしい位です。乗船した時は、午後三時頃だったと記憶します。私共の分隊は乗船すると早速、勤務命令と受けて、私は軽機を持つて船の先頭に出ました。軽機には弾薬を装填して何時でも

射撃出来る様にしてゐました。私の乗つて
ゐた船は彌彦丸と言ふ。随分太き巨船でし
た。乗員は千余人もあり、それには兵器
馬匹 糧秣 車輜等ですまじい程であ
りました。私は一寸船尾に行つてみました
らう。スクリーナーは激しく白朧を巻き上げて
ゐました。船は益々速力を増して、黒煙を
吐き下り、何處となく進んでゐます。こ
うした海上生活が何日も續けられます。

血は踊る

〇〇へ敵前上陸と聞いたのは何日か過ぎ去
つてからでした。船内で二三度内地からの
郵便を受取りました。私にも十通程ありま
した。
或日の晝食時局に將校の方々が、地圖を用
いて、何かさかんに話し合つてゐました。

之を見て私は、敵前上陸だぞと感
じた。日章旗を翻して進んで行く大船の群は
三列縦隊に整然と並んで、實に壯麗でし
た。所々に土民等が漁に出て居り、望遠
の航行を見て、両手を振り下り歓迎して
くれました。其の時誰か
「柳汁々々、山が覚える」
と言ふ。遙かに遠木もな、山が霞に包まれ
てぼんやり見ゆる。上甲板では他の船から
信号手が益人に手旗信号を交してゐました。
夜は又赤や青の照明で信号が交されてゐ
ました。
或朝大船の艦路に巨鯨が潮を吹いて横切つ
たと云ふので、一同大急ぎで甲板に出まし
た。私が出た時はもう沈んで見えませんで
した。此の時船長が
「船の前を鯨が横切ると、此の先が戦

斗は吾軍に非常に有利である
 と私共に話してくれた 戦斗に経験が浅い
 私日此の時非常に力強く感じました
 十一月四日 三列縦隊の艦は遂に目的地に
 達したか 杭州湾沖 数千米に碇を下しま
 した 甲板に出て見ると 霞越へて故國同
 様の風景が望みられます 艦船はと見れば
 その数突に七八十隻 杭州湾を圧してその
 巨体を並べておます 船長は
 日本を出て始めて見る壯觀です
 と驚いておました 私達が驚くのも無理か
 らぬ事でした 此の日はとんより曇って
 遠くの方はあまりよく見えなかつた
 午後五時 明日は愈々上陸だ 皆心の準備
 をしてあり といふので早速教理にとりか
 かり 上陸準備を完全にしました
 オイ戦友明日はやるぞ うんとやるぞ
 と囁み立つ 十一月四日の夜も既に十二時


近くなつておました 眠ろうとすれば
 の中には既に戦斗が開始されておました
 成通上等兵が「文は流るる！」と唱へ出
 して皆を笑はせました 何時の間にか電燈
 は消されて あたりは眞暗でした

火蓋を切る

今日十一月五日 一生忘れぬことの出来
 たる杭州湾敵前上陸の日であります
 昨日より曇つてゐた空は 今日曇り低くた
 り 朝霧が深く一寸先も見えぬ様に立ちこ
 でおました 我軍にとつては至極有利で
 煙幕を張つたも同様です
 午前七時三十分 艦砲は一斉に火蓋を切り
 ました 砲声は天地も裂け人ばかりに 朝
 の静けさを破つて東洋全土響き渡りました
 不意の砲声に驚いた敵軍は 其處此處から
 水カッパチン といふ音で機銃や

小銃の射撃を始めた。時既に過ぎ、
下船命令九時三十分。死んでも行かぬと
握り小銃。軍装した体に救命具をつけ、ヤ
ンクに乗込んだ。一隻は僅か三十名位、チ
ヤンクは夜に中絶して今にも顛覆しそうす
私達よのせた舟は、波に縦横に揺られ、敵弾
雨と飛び交す中を、勇ましく進みます。海
岸より三十米位のとこまで来た時、船員
「皆さん、此處で降りて下さい。ここから
先は舟が行きませんから。」
と言ひましたので、一同我先にと飛び込み
ました。潮は下腹部に達し、手で渡河戦の
柵です。私達は波も蹴立て、陸地に走りま
した。舟は何度も、も往復して兵隊を
運ぶ。大船の許にかへつて行く舟の日
章旗が、潮風にハタ／＼と鳴ってあります。
空には海軍機がたのもしい轟音をたて、

艦が交ひ、鮮やかなライオンが急降下し、
五六百米のところから敵陣地に爆弾を落
す。雨の機首を上空に向け上昇します。見
てみて胸がすく称です。
私が上陸した時は、敵が三名捕へられて
砂地に伏してあります。英軍の部隊は海
上からの砲撃と、空爆に依り炎を上げ、杭
川湾一帯は見ると間に火の海と化してしま
ました。赤兵部隊は右に左に進軍し、彼我
の銃砲声物薄く、いたるところに喊声があ
がります。
私は軽機を前に、壕を飛び越へ、突進
して行きました。斯くして午後五時には一
部落を掃蕩して、三十分後には一時戦を
中止しました。然し遠くでは銃声があつた
りなかにいてあります。
私達の部隊は又銃声のする部落に迫りま
した。さしもの敵も皇軍の威カに恐れてか

その姿を消してしまふました。杭州湾一帯は皇軍の手に落ちてしまつたのであります。六日の空は美しく晴れ渡り、日章旗は折からの朝風にヘンボンと翻り、又「日軍百萬杭州湾上陸」と記した「アドバルーン」が空高く氣持よく風に中れております。この時私は「困難の御国に生れたもの」と一人喜んだものです。杭州湾の上空には、何時迄も、 氣高の日章旗が翻つておりました。

一死奉公を誓ひつゝ

歩四七、十一

歩兵上等兵 樋口直吉

塘沽から小蒸氣に乗り、津合の本船に乘移

つた途はよかつたので、それから先は何處に行くのか、我々に任せつぱり見當がつかせせん。色々のデマが飛ぶ、やれ満洲だ、北滿だ、内地に帰るかだ、等々。磁石を取り出して方向を熱心に見てゐる兵隊もありました。船足が急に鈍り何處かの沖合で止るらしい氣配がしました。夕方迄二三隻しか見えなかつた船が、一夜のうちに海上は、大小數十隻かの御用船で一杯です。その中には軍艦も交つておりました。船の勢揃ひです。実に壯觀なものでした。始めて行先が傳へられしたので、抑々、落着いて皆新らしい覺悟と感謝と覺え手した。軍装を整列の号令で背島表の上から救命具を著り、銃を肩に掛けて整列、揺れる繩梯子を何回となく、昇り降りして演習は

終り手した

十一月二日 巡洋艦 驅逐艦の護衛隊中に

二列になつて威風堂々 荒波を蹴立て、杭

川湾へと航行します

「行手に鯨の火群を見る 幸光よし」

と言つた意味の快報が傳へられました 我

々々燃えさへは一段と高鳴り 血踊ると思

ふが致します

船中は迎へる明治の佳節は甲板に集合して

言ひ知れぬ感慨の中に東方遙拜 一死奉

公を更に新に誓ひました

遙か水平線の彼方には雲の如く島影を望む

ことが出来ませぬ この日汽船會社から戴いた

大きな羊羹を皆ニコニコして頂きました

杭州湾に着いた船團は 投錨して緊張の

中に一夜を明かしました 十一月五日 皇族

にて救命具を著けて甲板に上れば 一面の

濃霧で 陸地をどうも見當がつかず七人

上陸命令を待つ間しばし 工兵隊の操る小

舟が船腹につけられます 繩梯子は己に教

回練習済みです 少しも師の半はありませ

せん 濃霧の中で彼我の銃砲声を聞きつゝ

小舟は波に揺られながらも一直線に幾軒か

進みました 突然サーツと言ふ無気味な音

下船の命令 水中に飛ぶ込みます サア

サアと波を蹴つて陸に向へば 海を眺む敵

の掩蓋銃座 狂った様に火を吐きませぬか

己に先着隊はその足下に迫つて居ます 激

戦の跡を偲ぶつゝ岸に上れば 敵の浮葉そ

か他の物が足り踏み場も無い様に散乱して

前線部隊苦戦の様が思ひ浮かれました

空には海軍機が三機 我々を護るかか如く

旋迴してみます そして時々急降下で代

る代る爆撃する 壯觀です 痛快です 我

々は無事上陸出来ました

小休止 人員臭呼 折から降り出した大粒の雨の中を 部隊長殿始め泥人形と化して 一路退路遮断のため猛進撃に移りました

海の中から



敵に應戦

歩四七 RIA

清家 豊

クラクラと云ふ錨カ音に落被ル 目的地に着いたのだと思ひ 甲板に飛出て見ると まだ明けざりぬ十一月の朝は身を切る程に寒い 陸はどの方向かと見れば一面に真白の霧にとざされてゐる 船内に入り朝食もすみ 昼食を飯盒につめ己に上陸準備は終りました 甲板にはボートを下す起重機の音が唸り出

しました

六時頃には小銃中隊は上陸を開始しました ボートが本船を離れて何分かの後には 盛んに銃声が聞へます

「ボート 愈々やつてゐるぞ」と心の中で思ふなり 自分等の上陸の眷を待ちました

十一時昼食を終り 十一時三十分頃自分達に乗せるボートが帰へつて来ました 愈々上陸かと 緊張して乗込玉 工兵隊の手に

敵弾は来ますか

と問へば

「ナニ 敵は退却してしまつてもう居やしませんよ」

と言ふ やがて快いエンジンの廻轉と共に ボートは静かに本船をば反北陸に向ひました 泥色の海水はよく遠にざり 流れは黄河の林です ボートには聯隊砲二門と

其の他半輜糧等 人員は中隊長殿以下
十余名 二隻のボートは概ね軸を並べて走
る 幾隻かの汽船 軍艦の間を通り やが
て陸も同近になつて来ました

軍艦からは盛人に巨弾が唸り飛んでゐます
陸はまだ六百米もあろうかと思ふ頃より

ビュン／＼／＼と敵の小銃弾が頭上を
通り出した

鉄帽をかぶれし
と中隊長殿の聲が響く

陸は刻一刻と近づき四百米位になり突
然ボートは丹底がつかへて動かなくなつた
舳に居た二三名の戦友は飛込んだ 自分も
おくれてならじと飛込みました 水深は腰
の附近迄あります

此の日の自分の服装は 九二式電話機の上
に天幕の袋をかつぎ そのうゑに防毒面を

持つて居りました 此の間敵弾は均薄に唸
りたて、ボートの附近に集束して来る
早く砲を下して射撃しなくばはと氣が取れ
北とも 海上のこと、と思ふ程に出来な
い

やがて砲身が海面に浮上る所迄引上げ
敵陣へ轟然と發射せかけました

敵陣地は二十米位間を置いて掩蓋陣地が並
んでゐる 海中で観測班により距離を量
り

半も出来ず 目測で隊長殿が 三百八十米
と叫んだ聲が今でも耳に残つてゐる 發射
する度に 砲身の口座に白い水煙がパツと

立つ 距離が近いので彈着命中率は非常
に良い 忽ち正面の敵掩蓋を吹上げてゆく
其の時頭上を シュ／＼と砲弾がヒ
ンで行く 軍艦からだと思ふ瞬間 右前
の敵陣地の廟を吹上げました

敵は打たれても叩かれても 依然として頑

強なる抵抗を止めず、敵兵の中には立射で陣地内を狙撃してゐる奴もゐる。突撃して一刀の下に……と思へども、鉄條網が十重二十重に張り廻されたために小銃中隊の前進も出来ません。

そのうちに砲身に潮水がはいるので油で通しても同じ。そんなにして射撃を續けてゐる中に薬筒が焼付いて射撃が出来なくなりました。敵は更に猛烈に突つて来ます。そこで此處に戦友がバタ／＼倒れる。此處を目前に見て限りない憤怒に燃えましたが如何する術も無く右の方に移動を開始しました。私は分隊の甲斐軍曹(當時一等兵)と二人で弾薬箱を持って移動してゐる中に、一ツと飛来した一弾は甲斐君の下腹部に命中。「ヤラレタ」と言つたまま、私の方に倒れかゝりました。私は友をかゝえて砂濱に上り、疵を調べて見ると盲管らしい疵

の附近は此景色に變色してゐる。ガッリ勵ましてゐる中に、砲を引いて他の戦友達も上つて来ました。時計を見れば潮水に濡れてゐるけれど五時を指してゐる。あれから五六時間経過してゐます。

敵陣下に居る時は別に寒さも感じませんでしたが、急に寒気が襲ふ頭がガク／＼と震りました。

其の時機銃の爆音を聴いて、飛燕、如く飛び来つた海狗の荒鷲二機が、急降下爆撃を始めた。敵空しては北上掃射をやる。

敵が退却を開始したことがうなづかれます。その中に敵弾も少く降りましたので、戦傷者の救助は一同懸命に努めました。

四圍に夕闇が迫る頃より、ポツリ／＼と降り出し、各人砂手みみになつて宿舎に入り、心な、戦死者の火葬を一度にやりました。昨夜迄は一床に起き臥して音楽を奏

にせし友よ 仇は必ずとるぞ 心に念じ
英霊よ安らかなるれと祈つたのでありませう

戦の前後に敵死る

歩四七本部 首藤 軍曹

杭州海上陸の時です。敵は陸上から猛烈に射撃してゐる。砂原に伏せて應戦してゐたのです。自命のすぐ傍に居た井上一等兵がツクリ下げた。やられたと、頭を割。弾の来り中にすつくと立ち上り、両手をサツと差上げ、天皇陛下と叫んで、パツタリ倒れました。誰かの傍で悲痛な声で「バニザイ……」

と期せず附け加へました。が、真に猛烈な最
後でした。

何しろ満干が急激なので、砂原も忽ち満干
たる海水が首迄来る。首迄来た。依然として敵は猛射を續め、見ると三
百米位の所に重機銃を置いてある。よし
と狙ひを定めて射つた。擧げ弾筒が見事一發で
命中して、制圧した時は、痛恨でした。
今迄自分の方で奮戦してゐた兵隊が
急に波にもぐつて見えなくなりました。波
直ぐ大きな容疑が立ち上り、波に足
に足を突かれたのだらうと覺てゐると
ウーンと唸つて横に倒れました。見ると見
る中に、その附近の海水が真赤に染まつて行
きます。にじり寄つて抱き起せば、胸部を貫
通してゐるのでした。
前後左右に負傷者が次々に續きます。が
海の中へ落ちて、思ふ程に遠くへ出ま

せん 丁度海軍の飛行機が来た時でした
中隊長殿が

「今だ 之に協力するのだ 突撃ッ
と抜刀して突進して行かれました

あの上陸の時です 聯隊砲は殆んどやられ
て残りの人員も少い その上砲がめめり込
んで動けないのです 自分は走り寄って加
勢して やつと引上げてやつたのですが
陸に上つて見ると腕から血がどん／＼出る
のです 夢中だったので 負傷して居るの
に気が附かなかつたのです 後から段々
傷の痛みがひどくなつて来て困りました

洒落白紙になつて

歩四十七、三、山路野 茂喜

他部隊の上陸中でせうか 先程から陸の方
で 小銃機関銃の連続射撃音が聞へて来ま

す 上陸援護の砲撃も始まりました 愈々上
陸戦は始つたのです 命令を待ちあぐね
た兵士等は 武者震ひしながら降口に向つ
て押寄せました

司令部の幹部が代り／＼マストの上に立つ
て陸の方を懸命に見つめておます 室内で
も將校が忙し／＼に上陸準備を進めておま
す

この時陸の彼方より 一隻の小舟が近付い
て来ました 見ると師團司令部の中佐殿ら
しい 登つて来る足の歩みも軽く 急ぎ司
令室に駆け込みました

やがて 今朝午前五時を期して國崎支隊は
敵前上陸を敢行し 之に成功せりとの情
報が旅團にされました 聞くもの皆喜びに
湧んでおます

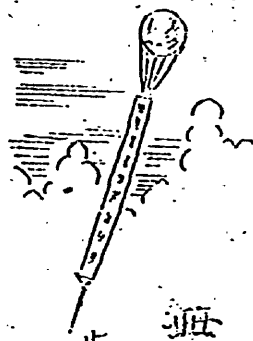
然し豆を煙る杯を銃声は依然として止まず
上陸部隊は盛人に戦つてゐる様です

0040

38

小隊長殿の指揮で第一團の我々上陸部隊は
 發動艇に移乗しました。出発の合図は下り
 ました。小艇は本船を離れて渦巻く濁流を
 蹴立ま、岸に向つて着地に突進します
 江南の地に無事上陸出来るか。杭州湾の藻
 屑となるか。一瞬かすかに艦裡に浮ぶも
 直ちに自分さへわからぬ位に緊張します
 我々の小舟にも、今に敵弾が降り注ぐかと
 心待ちに待つも敵は一向に射撃しません
 此れ幸ひと船が岸に近づくと、我先にと海
 中に飛び込みました。腰から下は濡氣です
 グン／＼と前進して百米も進んだ時です
 パン／＼とドド……敵陣より猛烈な一
 斉射撃です。バラ／＼と四辺に弾丸が落ち
 ます
 小隊長殿指揮の三ヶ介隊は、他部隊と連繫
 しなから、遂かに百米もある敵陣地へ猛然
 と攻め前進を起しました

敵の第一陣地を占領して、部落より敗退す
 る敵軍攻撃する頃迄も、後続部隊は蟻の窟
 出るかの様に、小さく沖合より上陸して来
 るのが見えませんでした
 斯くて敵の窟を突き敵前上陸に成功、上海
 戦線を一挙に繋ぎ端緒を作ったのです



無事上陸

歩四七、二

歩兵軍曹 中島 高

昭和十二年十一月五日 折柄の濃霧を天
 興の幸と、日軍百萬杭州湾上陸の歴史的ア
 ドバルーンがあがった
 舟艇の誘導に誤つて、他部隊の上陸地点に
 上陸してしまつた松達の中隊は、敵が我々
 の生命を狙ふ一物の遮蔽物もない砂濱

言語に絶する危険界に身を曝し出してしま
つたのです。艦上から垂つ砲弾がすさまじ
い音をたて炸裂する。前の防島から機関銃や
小銃が物凄い音を立て、前後にとんで来る
弾丸はしきりに来るが、敵兵の姿はまるで
見えません。

爽快な音がした。又海軍の砲撃です。重撃音
と共に黄色の土煙が立ち登る。聯隊の上陸
地裏は右らしい気がする。皆右らしいと言
ふ。附近の兵隊にたずねるが聞へない風で
す。

私は擲弾筒分隊の彈藥手である。背から
前にかけて彈藥表には四個宛ニツ。都合八
發の榴彈が入つておます。走る度毎に六股
ま打つ。仲々重い。そう安々と走れたいが
ほや／＼と斜行する。どうも一直線の前進
より困難だ。不安極まる。火まじり声で

「何處の部隊だ」

と連絡するが、すぐ機関銃の音に消されて
判らなくなる。全く喧噪です。

弾があたるかも知れない。砂原の真只中で
ある。小銃手なり良いと思ひました。後の
海中でかすかな唸声が聞へた。円匙を頭の
前に突き立て、そうつと後を見た。兵隊
がやり北た。小銃弾が頭部と通じたら
しく、頭から吹き出す血が附近の水を赤く
染めておます。

前には先の上陸した部隊が散用してあるが
容易に前進出来ない。負傷者が出たりし
た。衛生兵々々々。と叫んでゐる銃を持
たぬ衛生兵が駆けつけた。
迫撃砲弾が轟然たる音響を立て、落下し
た。すごい水煙だ。ポーン／＼、ゲツ／＼、
機関銃。小銃弾が飛んで来ます。
分隊長殿、右前方に國旗が見えます。

石だく、おろしい、石へく、斜行する、
一回の躍進が十米位だ、余り遠くまで走ら
たり抱い、大分右前へ進んだ、
だんく、銃砲聲が遠くなった、大分氣持が
落着いた、樂になつて来た、

もう大丈夫だ、
と、その時思ひました、

潮水に濡れて銃の柄桿が引けぬ、伏せてお
て息を吐き、ポロリと榴弾が一つ落ち
た、慌て、拾つた、大切な宝物である、こ
れを大切にする事が自分の任務です、

もう弾丸も来なくなつた、上陸戦で助つ
たと思つた、遠く左の方で、まだ弾丸の音
が聞えます、

元氣な足取で歩き出しました、遙か石に部
隊が見える、友軍らしい、
午前十一時頃、やっと金糸娘橋で中隊に復帰

した、松本分隊が未だ帰って来ないが彼は
皆元氣です、ニコく、笑つております、共に
無事を喜び合いました、

上陸に成功した、大兵團は物凄く追索戦
に移りました、夕方から雨になり物凄くド
シヤ降りです、我衣も何も濡れ鼠になつた、

背筋に水が入る、歩く中に全身が濡れ
に成つた、寒い、軍袴が濡れておて股をこ
する衣ずれである、痛む、

手袋もあつたが、何處でなくしたか、
皆風邪をひいておる、股が痛い、大喪反道
だ、小さな一本道です、

両側の榴田は黄金の波がうつておる、どこ
まで一本道許り行くのだ、支那には二人は
道しかないので、腹が立つ、泥海の中を泳
いでおる様です、足が一本歩誤つたり、二
米も三米も低い田に落ち込む、落ちたり最

後上れぬ もう二度も轉んだ、もう倒れぬ
ぞし ツルツと下へつて轉んだ音がした
「又誰かやつたな」 雨はとめどもなく降る
疲労が増して氣力がなくなる

暗くなつて無名部落につく 皆背囊を背
負つたまゝ足を投げ出してゐます 話もし
ない いゝ氣持だ この儘極樂に行つても
いゝ様氣がする 此處で宿營かと思つて
おたら又前進命令です

外は真暗で空には星一つ見えないうち、まだ細
い雨が落ちてゐる 彼方此方で懐中電燈が
滅滅する 曲つた小さな帯の様な泥の一本
道です ロトソクに紙を巻いて辺りを照ら
した すぐ後から歩くとひどく暗い 足下
が見えないうち 危険千萬です 燈台下が暗い
のです

案内外灯の方向が良い 四十程位の道の片
側はクリークに近づいてゐる 夜目にも水筒

が白く光つて見えます この重い背囊を
具に一步誤つたら土に落ちた 犬死したくは
ない

片側の箱田に近く歩く 一歩々々氣を付け
ていゝ 道の表面は泥で下は硬い赤土りし
い 心を配つて歩くと又こゝろだ びつと
起きて今度は平氣を装つて歩く 暫くする
と又やつた

「やつぱり注意して歩いた方がよい」と思
つた 誰も話をしない 冗談など言へども
人知やない やつと歩いちゃゐるかに つる
りと足が滑つて鏡を握つたまゝ、身体が
前に倒れました これが六度目 肩難くは
ない 記録を下 服も兵器も何もかも泥だらけ
に落ちてゐる そのまゝ、しばらくづつと寝
てゐる 眠い この儘死んでも良いと思ひ
ました 後から静かに古兵が歩いて来た
「誰か 起きろ」

返事もしない。うらとしてゐる。考へた
 「敗残兵に居りたくはない。やがて整着る氣
 はなつた
 銃を杖替りに立ち上る。力がな。フラフ
 し寄り前に一歩出た。又歩き出した。腹も
 空いてゐる。背囊にカンメンポトがまだ二
 個あるが、それを出すのが慎却だ。その水も
 枯れてゐることばかりきつてゐる。やつ
 と六日午前二時過ぎ、銭家坪にうきまじた
 家に這入つた。附近の薪を集めて火をこ
 け傍で靴を脱いだ。ニツと思つた豆が三ツ
 も出来てゐます。空氣に當るといゝ氣持で
 す。地に觸れるとチンクする。腫れが太
 き足に屈つてゐます。熱ぼけて自分の足
 ではい様です。ヨドチニキの荒療治が終り
 ました
 極度の空腹を感じる。炊爨するにも昨日未

の豪雨で泥水ばかりありません。誰も彼も泥
 人形です。顔が白粉を刷いた様に居つてゐ
 る。仕方がない。軒下の瓦の中にも雨水が溜
 つてゐるので、之で炊爨です。午前三時過ぎ
 やつと夕飯にありついた。たまたまなく美味
 い。雨はまだ降つてゐます。

◇ 其四ノ六 若杉黄陽男(軍曹)

今日も又戦友を失ふ悲しみか？

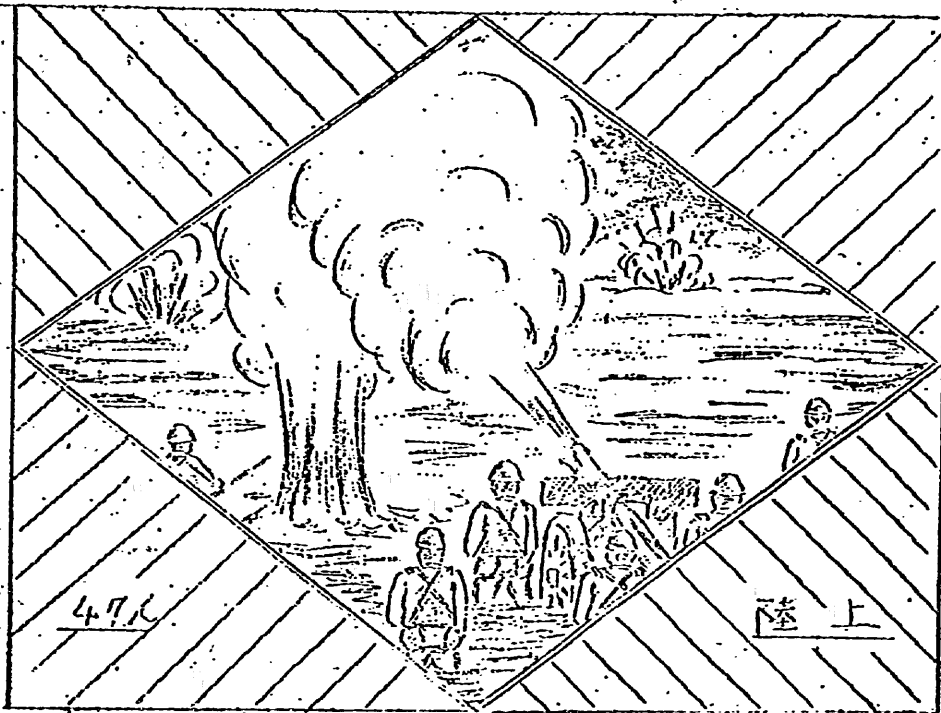
国のためぞと我を叱れり

なせ俺等のこして先に進ましかと

遺骨を拾ひて戦友を恨めり

◇ 其四七 其八 梅本敏夫

安否をもう待つばかり白ダスキ



聖戰幾度誓生死
 將兵奮躍進堅陣
 城頭高揭日章旗
 憶英靈新悲憤淚

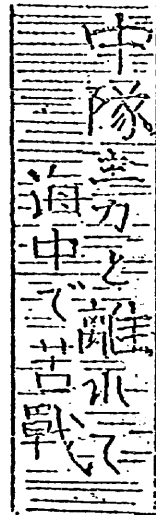
步四七一三

步兵少尉 齋十郎

步四七四九

步兵軍曹 佐藤嘉六

聖戰前途尚遼遠
 匹夫忠誠不可輕
 研鑽練技亦磨膽
 可期他日不當勇



歩四七ノ二

軍曹 板本政雄

朝霧に覆れた五日の朝は無気味な緊張の中にも明け初めて参りました

上陸第一陣岡崎支隊の戦況や如何にと尋ねる私共は朝食を終へ飯盒に晝食を一杯詰めた後、命を待つばかりであります

八時半頃でした。岡崎支隊の上陸は大成功との報を聞き一同思はず快哉を叫びました。間もなく小艇が舷側に水の音の様に着

きました。急ぐ上陸決行です

私共は人員の都合と荷物陸揚の別任務の爲に小隊長と離れて他中隊の半端艇に乗せられた。艇長(正兵上等兵)の舵に全運命をまかせて各親衛から次々に矢の如く離れる。無数の小艇と先を競う様に波を蹴立って陸地へ敵陣へと急襲します

上陸前進の方へは、小野上等兵は連絡係、私より左は河野勇一等兵、中田一等兵、軸丸一等兵、香原上等兵、石井神田一等兵、長野一等兵、河野了一等兵、田次上等兵と前以って各自の任務、部隊は是のてあります

約二十分も経ったと思ふ頃、ヒュン、と何處のりともなく敵弾が頭上をがすわる。弾が来るぞ頭を引込み、艇裏の隙端に身を隠す

首領は恐れることはないと思ひましたが、艇長の命に従います。ところが途重に川へ

飛弾は激しく小艇間近の波間に 絃側に
「シュー」カケツ「ピケヤツ」と無気味な音
をたてる 国崎支隊が無事に上陸したとい
ふのにおかしいなあと思ひました

上陸開始

と言ふ聲に船首に居た私は

前へ

と号令して先づ海中に飛び込みました
海は胸迄でありましたの上干潮が早くて吸
ひ込川のようにぼりますので伏する様にして
命令に違ひました

右翼方面には多くの兵士が豆を散らした様
に見えます 重機程機の音がして激戦中か
です

私共の左翼の方には友軍は一人も見えませ
ん敵との距離は約十米 一線に連つた台地
から小さい煙が引切りなしに揚ります
最も翼に突然停んだ我が隊を敵は二川

幸と泉中火を送るらしい

何處か前進くと頑張りますもの、第一目
標たる 海月巻らぬ建物も見えず中隊主
カも各自判らぬ心細い限りです

ヨシ前面の敵を攻取ると意を決して敵弾
下を造りました もの、四五分も経つた頃
でした

分隊長殿へ吉原上等兵がやり川まじり
と言ふ聲に後を振り向きますと 吉原が海
中に倒れて居ます

何處だ何處だ 何處をやら川に

上野上等兵と中田一等兵に救助させました
が右足関節の貫通で引起すことも出来ず
と蓋つて前には敵 漣川で行く訳には参り
ません その上満潮に変わった上げ潮は押し
かける様に踵迄ドツくと押し上げて参り
ます 二人共抱きかゝえては下し 下して
は抱きかゝえて居りますが 分隊長へ

と位で双馬るばかりです

處が幸ふことには後の方が幾艘も小艇が

末ののに気が附きました 聲を限りたせと

呼んで助け上げました

どうぞ無事に返還して呉れ とい心の中で

身を合せ又 進め 前へ と躍進に努めま

した

七百六百五百と敵との距離が接近するに従

つて益々弾丸は激しくたりました ころ頃

左翼方面にも大部隊がどん／＼上陸し、来

ましたので我々も救援隊が来て呉れた様な

心強さを感じました 人員が増加すれば

する程負傷者も殺出して見て居る間に

パタ／＼と倒れます

海が血で染つてその血が波と共に揺つて行

くのは何んとも言へぬ嫌な気持ちです

頼りとする銃も止っては射ち 射っては這

ちの中に泥と砂とらまつて洗つても／＼射血

不能になつてしまひました

切高扼腕と云う機を見て前進するより外

に道はありません

その頃先づ方角に友軍の騎隊砲が一門出て参

りまじた ぞして水煙を上げて撃ち出しま

したので急に分隊員は元氣づき

彼方に直機 此方に輕機 と盛んに敵情

を通報してゐます

ドガン と敵陣に炸裂した砲弾で敵が吹飛

ぶのを見て仇討が出来た様だ痛快さを感じ

ましたが三川とて永くは続きませんでした

銃身まで海中に没し五米程前進しては一発

と云つた具合にはか／＼しく行きません

その中に敵の重火器の目標となつて今迄勇

敢に戦つて居た砲手達が殆ど全滅に等しい

損害を受けました

天宮陛下萬歳を叫び 分隊長殿と呼び悲痛

な聲を殺しつゝ、悔に涙をかきして行く惨い

惨 突に悲壯な情状でありました。我が分隊はおへ石へと移動しました。苦戦に陥りまして、私の直ぐ後方にいた小野上等兵 腹部に貫通銃剣を受け、分隊長と呼ぶ年う前に伏する様にして倒れまい。た 河野一等兵が直ぐ引越しました。が、当の甲斐も無く次第に呼吸は苦しくなると行くのでした。續いて前方で射撃して居た河野一等兵が胸部を貫通せられて一言も言はずに即死しました。相次いでこの打撃に氣も動かしなげりです。動かぬ屍體に部下 押し寄せる波 私ほ全く虚無に窮しました。口惜し涙を押しかくし 悲嘆の途をおぼしめ心にまなく無暗に部下を叱りつけました。此頃 突如 木と枝が因縁に部下を激刺し乍ら戦女達の屍を引ずり引ずり砂浜へ所談へとたどり寄りました。

漸く死体。流氷を物々感慮展置が出来ず。トして時としても憎い敵の一弾は河野一等兵の右足を貫通しました。氣丈は依は傷は深々と言ひ乍ら自命で繯帯を締めて見せましたので私は救世の様は気が致しました。己に敵前二百米です。前面には鉄條網さえありませぬ。グツクしてゐると愈々全滅です。鉄條網の右端から突入する。石へ移動。右へ移動と今は半滅した分隊を踏躰として一築突進の感も伺ひました。との附近に追突した他部隊でも側射の為に多数の死傷者が出て居ります。一死を決しました。一丸となつて突入します。足立つた敵は陣地を捨て、敗走しました。時に二時四十分でした。日愈強のもとに相よつても野が薄くも口吹り汚泥として沸き出づる悪念の涙にかきく川ました。萬死もとより鐵條網の前には申し乍ら中隊を

はな川で分隊のみ對く、落着き、苦斗の渦中に
殺じようとは予期致しませんでした
今はとき英靈よ許し給へと只祈るのみであ
ります

砂糖に赤線

歩四七ノ六 松成伍長

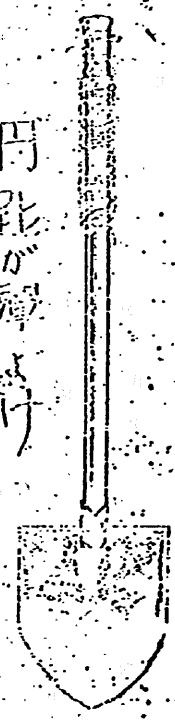
六中隊は自分達の第一小隊の上陸する事
に終りました 掃蕩を期して天幕の露が一
杯 誰の顔にも次々起る霧を弄へてか深
刻な表情をして居ます やがて察知艇に赤
せり出ました が敵剛上かけら出た視察子を
降り乍ら体が小刻みに震へた感に覺へて居
ります あの時の勇猛 去年火野平の

と大隊を流しましたがあくどと思ひま
した

降りると言はれぬ石手に持ち上げて飛び
降りた處は乳道の隙ともあって 隊員自分
は遠慮で買入られた砂糖が濡れとどろりと
思ひ悲感しました 人間て奴は雨と背中合
せの時でも冷気が先かと情なく思つてこ
です その前 上陸して直ぐ舟候に出る
命令を受け居ましたので白砂糖の堤防を
偵察に行きましたが大した事もなく掃蕩に
たぬに降る日。たゞ在籍の終つた事を知り
隊に降り着きを指ささ以前に前進しました
約百歩も行った頃でしやうか突然バリク
と銃音がした 何將伏せたのか 着子を捨
てたのが自分ではちつとも判りませぬ
念くあがつてゐました

005i

円龍が禪をけ



卷四七六 江蘇宣曾

自分違には發動機が来ません。遠くを遠くを
取るのと気が気がやないし、必の將校の
方には此ら用ひし散々でした。漸く来た登
野艇に乗って行くところが亦方向を間違へて
十八師口の方に降りてく。潮は漲て来
る。始めの方の兵は円龍と出でて驚きけに
いてゐると言ふエ合で、心細いと言つたり
ありませんでした。
明るくはる遠待たうと所決進上りがたく
震へ乍ら強進待ち。薩りて大進兵、上り
とじてゐる人を見つ。兵士は此に聞いて漸
判り中隊に連糸に塔の元氣な顔を見て

キツとまじだ

雨は午後二時頃から降り始めました

徹底的に濡れ、は却つて日中の行軍よりも

楽ですが、それには違ひのこと、夜間はすべつ

て歩けるせん

夜が更けるにつれて幽體が増して参ります

前の者が釋べば殺の者が笑ふ、後の者が釋

べば前の者が笑ふ、始めは笑ふ元氣もあ

りまじをが終ひには皆もう意地も何もあ

らこま、つくろ、猫の眼が怒い、後

と思ひました

六可襲上陸を語る

卷四七五

座談會より

砲水軍曹

杭州湾の自分命産は精隊のしんがりとして上陸しました。前方には禁のちをばり掃いた様と戦友が上陸して居ます。船から降りると弾が激しくて一寸前進が出来ません。始めは膝射の形で鼻から上を出して居たのですがだん／＼満潮になり膝射から立射の姿勢に逆戻りしてしまいました。十一月の水の中です。身も足も潮でフヤケく感覚がありません。其の内に小用を催しまゝ、ふしみの俵やりました。軍持の取の中は小便がズツと僧日記何とも言へない腹みを感じます。冬の朝、庭を掃いてその落葉で焚火をやり股にあぶつて居る内に、ノウノと左ふあゝの音持です。余く好い事を発見したと無理に催しては腹を収つたものです。敵前上陸のことを考へると何時でもそれ水と

思ひ出します

小野軍曹

あの上陸の時は最後の然も最尤翼に上陸しました。隣りは十八師団。處が此處は敵が弱く、それ以て重火器も相当持つて居て大分苦勞をいたしました。右の友軍に近い方に移動しようとして敵迫る。砲の為、井上と下川が一人は戦死一人は重傷と言ふ最初の犠牲者を於て居る。噛みまじりた。之がやいかんと砲の跡が深く掘った係になつてゐる。地形を利用して擲弾筒で以て前面の敵を撲滅しようと自分が切発射した時でした。二三米砲の方で、やういふと叫ぶ戦友が居ます。榴弾を二枚引きを引かうとした時、ト振返つて見ますと、吉田さんです。

此奴は屯営。下假中隊に居た時からの戦友
で、動員があつて下假中隊は出陣出来んといふ話のあつた頃、演習も何もあつたわけ
營邊の隅で下假を止めて征かうと謀議して
わた時分かりで却々元氣一杯の奴で
した。

等五弾日掩蓋の銃眼の中に入つた弾が轟然
たる音響と共に吹き上げ、さしもの敵も沈
黙しましたので、吉田の處に行つて見ます
と顔を取られ、おうちけにのけぞつて、何
か言ひたいのでせうとせり、と上頸を遮撃さ
せて居ますので、身を握つて耳に口を寄せ
「吉田小野だよ」と言つてやりますと

判る、判る、と言ふ表情を日で表
し、自分の掌に「傷は淺いが」と書き、居
りますグット胸に来た感情を吹き飛ばす様
に

「遠く心配するな」と吸鳴つてやりますと、立ち上りうとする
のです。馬鹿ツと言つて寝せニこと三言
吸鳴つて分隊の処に降り、それ川からずうつ
と鼠の道奴の銃を持つて行陣しました。

砲水軍曹

上陸して最初の頃は銃を上げて居ましたが、
満潮に反るので終にはつけました。見ると
左の十八師団の苦心のさまが見えます。
然し強が激しいのでどうする事も出来ませ
ん。先刻も話しまじに様に暫くそうして居
り、海軍の砲連に力を得て一挙に陸上に駆け
上り、小隊長殿と六名ずつ眼の前、陣地に突
撃して最初の凱歌を上げました。
そして敵の側背に迫り十八師団の右一線の
攻勢を容易ならしむる様射撃しようとして
したが、南点ニ、銃の各部に砂が入つて

却々弾が出てく川ません。三發に一發の遠
度で射盡し小高の陣地をも領逃げて来る敵
を挾打の極な惨行でやっつけました
逆でよしと中隊の処に帰りますと、服隊副官
の高木少佐殿が

第五中隊は又犠牲者を出した
と言つてお叱言の最中です。森原さんと
隔の方にはさく戻つて居りました
縁の下の力持と言は川ますが他方の区域で
も何処でも射うせがったのです

渡良上等兵

自分達一小隊全部一つの発動艇に乗る事が
出来ました。目標は白旗の立つて居る處にの
ですぐ判り上陸して間もなく海軍の砲臺が
霧の杭州湾の空気を震動させて落下して来
ます。豪壯なものでした
植活補充の山下と言ふ戦友が居ましたか

見ると救命胴衣を四つも五つも体につけて
前進して参ります。松達は一刻でも早く程
く戻りたいと上陸してすぐ脱しました
火野軍曹殿が

何がそのサマは鬼憑し、弾の當る時は
どうしても當ふか

と叱り川ました。山下も恥らふと思つたの
が早速救命胴衣を投げ捨て部隊の先頭に立
つて歩きだしました

それ川が一人殺したと言つては喜ぶ二人射殺
したと言つては鬼の首でも取った様に
はしやりでなます

その内にも自分が砂糞やう。奈やうを徴察
して来ると

お、渡良毒は入つてないだらうか
とうさぎの眼の様は涼しい目でまじ
食へと言ふても却々身をばしませんでいた

自分達は各人の荷物も相當に持ってゐたんで、川に合隊で三間位の橋手を持たせ川を渡り、夕方がうす暗くと車軸も流さし、降りて来る雨の中に、すべったり、滑り、松皮が橋手を捨てる様と致しました。山下が持たうと頑張るので持たせましたが大合隊に反りました。大隊砲などは網で引籠ら、今解してびびく土と雨で夕うく、落し込む。足川でも皆助け合つてやつてゐました。翌日の夕方の五時頃、天文台に着き、私達の小隊は護衛に残ることに成り、附近から鷲をつかまへて来て夕飯の仕度をしてまうとします。照明弾が上り、ハツと思つた時はすつかり色圓を以ておぼした。退却中の敵が、小隊にも毒喰は、血送主義を以て、吾が部隊を包圍したかどおります。

夕暮川が迫りました。丘もクリークも次第に夕霧の被方に包まれて行きます。敵の射撃は益々精確さを加へ、松皮は隊長を中心に次第く、に円陣に詰めました。敵陣が風を知つて飛んで来る音、炸裂の音、敵の重砲が漸次壓縮さ川で来るのが見える様です。世は愈々最命だと思ひ、死守すべく決心しました。もうした最中上陸の時此ら川に、引府過衆祭りかた、だ、と語りけました。あの時に、あの聲、皆の頭にほのく、とし、を微笑と共に劇然とる勇氣が起りました。やがて何處をどうもぐつてきたのが大隊本部から敵敵位対手にせず、に追及せよとの傳令が轉ぶ様にして参りました。

運命の矢は山本と

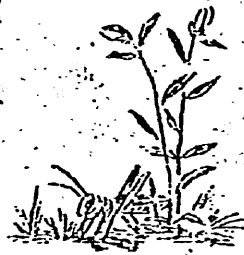
側面突破を試み 虚を穿つた企圖がうまく

成功して 再び見られぬと思つた大隊は

の下に集合し 暗黒の夢から醒めた様子を待て

した

退院



歩四七五三

梅本曹長

明日は退院心はほがし

今宵窓辺に現しける月は

たつきり微笑も女の顔

明日は退院心はほがし

親しい戦友の姿も見れる

射も釣ら川よあつくりくで

明日は退院心は躍る

友と一緒に銃剣とって

俺も行けるぞ机封へ

明日は退院心はほがし

窓にもたれ川よ口笛ふけは

遠く戦野の果までさびしく



船内で馬の運動	騎六、一 騎兵曹 山本篤哉
補充員の追及	騎六、二 騎兵上兵 的場鉄夫
水路行軍	騎六、一 騎兵上兵 吉莊光夫
水牛に乗って	騎六、一 騎兵上兵 三村翔生
泥水で炊事	騎六、四 騎兵上兵 奥村幸雄
通信筒を受けて	騎六、二 騎兵上兵 弦本政則
戦友の情	騎六、二 騎兵上兵 佐藤文彦
同郷の友	騎六、四 騎兵曹 古田武人
弱馬班	騎六、一 騎兵上兵 加藤丈天
哀しげな嘶を 背にして	騎六、六 騎兵第六聯隊
徒歩隊の敵襲	騎六、一 騎兵上兵 永井良夫
不覺中らぬ弾に	騎六、二 騎兵曹 島中政美
分隊全員で馬の看護	騎六、四 騎兵曹 島田三四

船内で馬の運動

騎六

騎兵軍曹 山本篤義

濱泊で船に赤くから呉淞に上陸する迄二十数日間 馬を弱らしてはと毎日船内の狭い通路に曳ひや藁などを敷き、牽馬運動を行ひ 馬の運動不足を補ひました。又常に

馬体の摩擦 海水を汲上げては踏洗をし

馬房内の清掃など 平常と異るところなく

やりました 狭い船内のこと、て 並大抵

のことではなかつたのですが、これから先

の事を思へば、苦しい筈言つては居られま

せん

愈し上陸しての隊と共に杭州湾に上陸し

た騎隊主力に追及するために行軍に移り

ました 私達の佐藤隊では僅か二頭の弱馬を出したばかり、それに反して或隊など衆馬を行く者より 牽馬で行く者が多く、某小隊など小隊長以下僅かに四五騎と言ふ貧弱さでした

此の時ほど 運動並に手入れが如何に必要であるかを痛切に感じたことはありません

補充員の追及

騎六

騎兵上等兵 的場鉄夫

十一月十八日 騎往立つ營門を後に 銃後

國民の熱誠溢るゝ歓呼の聲に送られて 補

充員として 戦火渦巻く中支に向けて出発

しました

0059

57

島影一つ見えないう大海から 黄浦江に入つたのは即ち落日の頃でした。兩岸の街は破壊されて、勇み立つ私達の胸を強く打ちました。処々に英米の國旗を掲げた軍艦が見えました。上陸命令に依り、始めて大陸の地に第一歩を印しました。廢墟と化した上海の街角に一夜を明しました。本隊は既に南京の近くに通つてゐるとのことです。早く追及しなければ南京攻取の間にはぬ。其の日から毎日、三十料四十料の強行軍を開始しました。行軍の進捗につれ、体は疲れて来ます。そんな時私達の口にするものは、

南京へくしの言葉でした。

途中松江、金山の要路を征服し、戦友先輩の血と汗を流した戦跡を一步々踏みしめ追及を續けました。

累々たる敵死体 巨大な砲弾痕 吹飛ばさ

れた敵陣地。総が私達の志気を啖り、勇氣は益々湧き上ります。太湖を左に見て進む頃は、本隊は南京を攻めてゐるやうに思ひました。足の痛みを忘れた勇み立つて前進しました。板橋を経て南京に向つた時、「南京城陥落せり」とき、今迄張切つてみた気がすつかり打砕かれてしまひました。南京城攻取参加を夢をみた一同は太い溜息をつくと共に、期せずして顔を見合せました。その顔はやせて眞黒になり、目は白く光つて、形相がすつかり変わったのであります。

いく月を待ちにまちにし大君の

今日のみめしをこのよるにびぐ

(西) 正典

0060

水路行軍

騎六ノ一

古藤 光夫



私達は徒歩隊となつて 楓涇鎮から湖州まで 水路を舟で行軍しました。クラークが二つに分れてゐた、め方向を間違つて一里も行つてから気づき、慌て、もどのところに引返したり 岸の良い所は 土民に縄をついて引っぱらせたり 戦争らしくない行軍をつづけました。

漸く湖州に着いて見れば 中隊は既に出発した後で 私達の馬も居なく 南京攻塵に参加出来なう様になりました。それから仕方無しに徒歩で南京へ向け本隊に追及しました。

水牛に乗つて

騎六ノ一

輜重兵上管兵 三刺 強生

上海を出発以來 徒歩或は舟で十二三日も経つた頃でした。一同全く疲れきつて歩いてゐると 誰かが大きな水牛を引張つて来て 悠々と背に跨つてゐます。附近を見るに水牛こそ多いもの 其処此処と皆呑気さうに構えて居ます。

俺も乗らぞ 俺も乗らう と誰もかれも水牛に近寄つて見れば汚いこと 体全部が泥だらけ 糞だらけで、ウワア、こら、い、なんなど、皆が悲鳴を上げ、瘦れ我慢を張つて見たもの、背に腹はかえられず、間もなく指揮者以下三十余名の者が、水牛部隊を組

0061

59

織してしまひました。これなら後幾千里でも大丈夫だとい同人に喜んで乗つて行きました。其の巾、爪がたんで捨てる乗り換え。大きな水を見つけては乗り換えしました。及可愛がる着は草履をはかせやう。或は二人乗りも見受けられし。種々様々な様子です。

兵も其の二人乗の方で、他の二人乗組と競走をやりました。南京入城迄か。それとも牛の競れを逃かといふ意気込みで、二組共一旦懸命競うりました。ところが早く、相当に走り出す。有頂天で一將も折つた頃、私の体かすつと前の方を下り出した。もう落ちたものと思ひました。落ちて居ませぬ。首に跨り、首を両手で掴んで夢中で走り出す。他の印圖の兵隊が、これを見て盛に笑つて居ましたが、何しろ心臓の強い私達のことです。大いばりで走り抜きました。

中隊の戦友達が、第一線まで苦戦中と知りつゝ、もよもよもめんが事が出来たものか、今想へは何か馬鹿か、早くしてやりませぬ。

泥水之炊事

騎六の傳

騎兵上曹長 奥村幸雄

其の日は朝からシヨボク／＼雨が降つて居ました。金山に着いたのは、夕方七時半頃でした。今夜は此処に宿營することです。皆決々約竹藪の中に馬を繋ぎ、先づ水を探しに行きました。了度なく近所に水溜りがありましたので、此處と草叢水を汲み、馬に飲ませました。おいしうに飲みます。まだまだ足らないので、四五回汲んで漸く

満足させました。今度は自分もグックと
飲みました。却、うまい。

水を汲んで帰り、飯を炊き、おいしく食べ
ました。

又明日の準備に、も一度飯を炊かねばと思
ひ、十二時頃、あんまり暗いので、電燈を

借りて行きました。その光で水を見ふと、
泥水です。をしてもうも、自分の立つて居

ると、ふかむが愁の上にて、居る様にアクク
して憂です。よく見ると、敵の死体です。

、こりや、かん、とすつと鼻を照して見ま
すと、死体が二つ浮いて居ます。

気が悪くなり、其のま、戻り、そのこと
を皆に話すと、皆も気が悪くなったと言

ひました。誰かが、
「何方がよいよ、時病の薬にならうと、たよは

言ひましたので、ふたつをよやくし、やめて
おた蒼も又飯を食ひ止めました。



通信筒を受けて

友軍を救援に

騎六ノ二

騎兵上等兵 玄本政則

十二月十九日、惨憺たる上海を後に、秋風
の戦野に駒を進めました。目指は敵の首都
南京です。

霜月半ばの風は冷たく頬を撫で、行きます
私達の闘志は火と燃えておます。

松陰鎮守金山の池澤は、私達の勇気を振ひ
起しました。私達は敵跡を辿って、その惨

状に、或は目を瞑ひ、或は闘志をかきたて
られて前進しました。

長興前進に至れば、敵の遺棄死体が七八百
もありました。

友軍の飛行機が二枚、敵の秋空に銀翼を輝

やがして頭上を過ぎて行きましたが、暫くすると引返して通信筒を投下しました。二十数將前方に下河安附近に於て。師團本行李が敵に包圍されてゐるから、救援されたいし、といふ意味の通信でした。快速を利して二十数キロを突破し、敵の背後をいやと言ふほどた、きました。

戦友の情

騎六ノニ

騎兵上等兵

佐藤三又喜

南京へ敵を逃つて、急行軍を続けること数日、最近敵影も見えず、何だか物足らぬ気持ちで一週間はどきりしてゐる煙草が無性に吸ひたくなります。戦友にきいても、誰か

持つてゐる者はありません

今日の行軍道程は、いつもより遠いやうです。前方を、何処かの部隊が前進して居ます。追付いて見ると、他部隊の大行李でした。皆元気に談笑しながら行軍してゐます。

口にはうまさうに煙草をくゆらしておます。吐き出される紫煙が、澄渡へた秋空に立ち登つてゐるのを見ると、たまらなく欲しくなつて来ます。その時一人の兵隊が

「あんた達は煙草を持つてゐますか」と親切に言つてくれました。私達が誰一人煙草を吸つて居ないのに気がついたのでせう。

「こゝ四五日、一本もなく困つてゐます」と言へば、彼はすぐ物入れに手を突込んで、魚造作に煙草を取つて差し出して

「これは吸ひかけですが吸つて下さい、ありがたう。」

0064

62

感謝の気持ちを言葉にこめて、押戴きま
した。珍しや、厚まねにです。吸ひかけと
言ひました。たつた一本吸ったまじりでは
た。をこ此処で、ありがたう」といふ声か
します。火をつけました。煙草の煙が眼に
もみまます。戦友の情が胸をあつくしました
はなれてしまひました

大行李をふり返つて見ると、すつと後方に
なつてしまひました。馬上に煙草の煙幕を
繙成した様な気持ちになり、皆うれしうに
顔を綻ばせておます。一同の意気は正に天
を衝くの勢です

一日の行軍を了へて、明日ほいよく敵に
會ふだらうと樂みにして寢につきました
翌日も又次の日に変わぬ麗かな上天気でし
た。もうそろそろ大休止だらうと思ふ頃
友軍様により、他部隊大行李の危急を知り
快達を利用し、二十余料を一氣にとんで

交戦救時間、遂に大部隊の敵を撃退しまし
た

同郷の友

騎六 M4

騎兵軍曹 吉田武人

時も場所も記憶せぬ位何もかも忘れて居り
ますが、十数日未の強行軍に、南京城を指
顧の間に望み、勇みに勇んでの行軍中であ
た

一日歩兵部隊と前後して行軍したことがあ
ります。割合に廣い道路も人馬車輛の波で
一杯に溢れて居ります。其の中から、突然
自分を呼ぶものがありますので、振り向い
て見ますと、同郷の、しかも同級だった友
人です。思はぬ処で、思はぬ人との奇遇も

車馬の騒音に 話も急ぎ消されてしまひ
ます 元氣だったことをお互に眼と眼で喜
びあひ乍ら 二人の間は距つて行きます
次第く 離れる友を振り返りく するう
ち

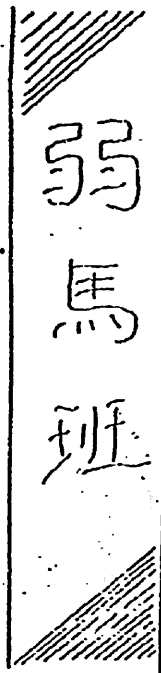
「オーイ 一寸待てし

と それこそカ一杯の大声だつたでせう

はつきり耳にひびきました やがて人を押
わけ 馬を遡り 車をくづつて駈付けた彼
は「煙草は熱いだらう」とポケツトから変
形した煙草一個を手渡してくれました 幾
何の礼を言ふ間もなく 又二人の間は距つ
てしまひました

此の時の煙草は湿気のため殆ど火もつかず
とうく 喫へませんでした 其の時のう
れしさ 疲勞の中からかけつけて恵んだ彼
の厚意の程は とても筆舌で表すことは出
来ません あの日の嬉しさ、あの日の感激

は 今尚はつきりと蘇つて来ます
南京陥落後其の身を詳しく郷里の親等に報
じた程でした



騎六、一

騎兵上尉兵

加藤丈夫

私達が命と頼む乗馬は永い船内生活に疲れ
て 或は乗馬に堪えなくなり 或は病気に
なつて 多数の馬が牽馬で南京へ前進する
事になりました

私の馬も腱炎になり その弱馬班にかりま
した

それ迄は毎日夕方迄には部隊に追及し 一
諸に宿営することが出たのです 其の

日は部隊の落鉄馬が来て工務兵の作業は意外に手間取り 脚を負傷した馬は益々 歩行困難となり 前進は捗らず 漸く夕方目的地らしい所にきてみれば部隊は居ませんもう少し先だらうと 弱馬三十頭位と健康馬三騎は獣医官を先頭に前進しました。附近で山にさしかかりました日は既に没し四周はうす暗くなつてゐますが 宿営しさうなところはありませぬ 本隊を捜しに行つた健康馬の槽騎が帰つて来て 殿残兵に會つたと言ひます と前方に灯が見える 獣医官殿が兵を出して見ると 歩兵部隊が居ると報告して来ました 痛む足を無理矢理に引摺つて行つて見ると二十名ばかりの歩兵が飯食炊爨をしてゐました

馬の予入を終り一々所分哨を立て、藁の上に馬と共に体を休めてゐるといつかの

寝入つてしまひました あたりがなんだか騒々しくなつて 目を覺して警戒兵にきくと 歩兵部隊が出発するといふ

歩兵部隊も本隊追及中らしく 騎兵が一個小隊来たから大丈夫と先發してこゝにしました 私達は私達で 歩兵が二十名もゐるならと悠々と寝てゐたのですが 夜の歩兵が行つてしまつたのでは仕方がありませんので 私達も腹板へして 再び南京へ牽馬行軍を続けました 馬よ 早く快くなつてくれ 南京攻戦には間に合小様にと祈りへ

哀しげな嘶き

北背にきいて

騎兵第六聯隊

初冬の日にはトツプブリと暮れて 木柵の壁には銀の星が淋しく輝いてゐました

十二月三日の未明、廣瀬を出発した松下作
様は、夕刻に至り本隊に合しました。
南京目指して進軍する騎兵部隊は、馬の蹄
を休めが遠もなく、即渡へ道々へ知れぬ山
路を踏分けて急行軍を続けました。
午後十時十分、隊伍の中におた向島号は急
に歩度を緩め、拍車も刻きません。騎手の
松下軍曹は、部隊の行動を妨げてはと思ひ
列外に出て後尾を続行しようとした。
すると向島号は前膝を折り、坐つてしまひ
ました。松下軍曹は下馬して腹帯を解き、
鞍を外したか、向島は依然として動きませ
ん。哀しげに首をして、樹を通過する部隊
を見送つておます。松下軍曹は哀愁を感じ
ながら、愛馬を動かさうとしますが、向島
は動きさうにもありません。
萬策なきに軍曹は天を仰いで嘆息しました。
駆けつけた獣医殿は

「之は過勞だ。仕方はあるまい」と言はれ
かうしてぬる中に部隊は、後尾も通り抜け
て、蹄の音もだんく、小さく聞かずに消え
て行きます。それを見送つておた向島は一
ま高く嘶いて、前膝しやら、追隨しようと
する様子ですが、力盡きて又ぐつたりと
寝てしまひます。
「今朝迄なんともなかつたか」と
と獣医殿は尋ねられます。
「今朝までは大元気でしたか、何今にも杭
州湾上陸以来の強行軍に、今日は又未明
からの作戦に出て非常に疲れておます」と
と軍曹の声はかすかに、切れくんに聞
えました。そして、
「向島よく御國のために働いてくれた
申し譯ないし」
と人に言ふ様に言つて、愛馬の頸を抱いて
男泣きに泣きました。

附近はいつよりとして、遠くに友軍の陣營
でせう、篝火が見える。

やがて、軍曹は決然として立ち上り、

「さあ行かう」と鞍を揺り、立ち去らうと
した刹那死んだ様になつてゐた向島は、急

に前掻して立ち上らうともがきます。

「ヒヒトーン」と嘶く声に堪えかねた軍曹

は、再び愛馬の許に引返し、溢れる涙を押

つて、腰の軍刀を引抜き、房とした鬣を

切り、紙を出して、町囃に包み物入に收め

「お前も御國のため、最後まで傷んでくれ

た、お前の屍を葬つてやりたいけれど、

戦場だ、俺は部隊におくれてはならない

。今に南京が陥らたら、其の時はお前も

冥途から喜んでくれ。

と涙は頬を滑り、馬の顔に落ちかゝる。頸

を抱き、鬣を撫で、最後の別を告げよう、様子

には、傍ら居た一同も泣かされてしまった。

かくてはならじと軍曹は、頌然として立ち
上り、一同と共に、凍りついた野道を追及
しようと急がしました。残された馬、残す軍
曹の心中は如何ばかりだったでせう。
追かける様に嘶く向島馬の声が、公切の
た夜の空気をふるはして、一同の胸に何時
迄も強く響いて来ました。

(獣医部提撰)

徒歩隊の敵襲

騎六、一

騎曹長上等兵 永井良夫

上海に上陸して首都南京まで、後半行程と
いふ或夜の三時頃、俄に敵が私達に対して
夜襲をして来ました。私達は
「自分は特務兵であるが、チャンコロ等ら

射撃のものが、
 と勇氣愈々湧き上り、敵の壁に銃眼を開け
 て射撃準備を整えてあるうちに、敵は早く
 も百米位に接近しましたので、早速一発ぶ
 つ放しました。すると當時は歩隊の引率者
 であつた今村軍曹殿が大きな聲で
 「永井、どうして射つか、陣地前に来る迄
 は、自分の位置を敵に知らしては駄目だ
 」と言われ、自分は変な風に思つておました。
 敵は益々猛射を続け、段々進つて来ま
 す。見てあるうちには、私達の居る屋根の瓦
 が落ちます。私達は詰まらぬ、敵の来るの
 を待ちました。
 すると敵、射撃はハタと止んだので、敵は
 大抵、始めのたむしと思つてゐると、私達が勝手
 に射撃した為には、敵の位置が判り、敵は
 包圍体勢をとりにながら、チリ／＼と進出し
 て来るのでした。そして次第に陣地には遠砲

射撃をより一層激しく送り始めました。
 其の時に、いきりたつ皆を抑えてゐた今村軍
 曹殿が
 「射て」
 と号令を下された。私は「今度は、え」と続
 け様に、引鉄をかきました。然し敵は一步
 も退きません。私も「こゝで死ぬぞ」と決
 心しました。味方の兵力は徒歩隊ばかり約
 一ヶ小隊ありますが、火器は小銃の小銃と
 るのみです。
 敵はもう五十米位に近づてゐます。手榴弾
 だと思つたが、私はまだ投擲法を知りませ
 ん。勝、本科の戦友に倣つて身遠で発投げ
 てみました。美事に発火しました。それに
 力を得てどん／＼続け様に投げました。や
 かに敵もや、ひけ目になりました。
 其の時後方に
 オ、イ、

と呼び乍ら近づいてくると、友軍らしき、戸分聞
えます。敵もいっしつか後退したらしく、銃声

も聞えなくなりました。
間もなく前の道路上を歩く「コック」

小隊の音は紛れもなく友軍、四七新隊
の一部が夜行軍して来たのでした。勇気

倍した私達は、朝食を終へた同部隊と一語
ばそこを出発しました。

不覚……中らぬ弾丸に

騎六ノ二

騎六中隊 中政美

十一月三十日、晴れ渡つた西空に、かす

かに友軍機の爆音が聞えておりました。たん

たん近づいて、低空飛行をはじめました。北

支で対空勤務に服したことのあふ私は、何

かあるなど思つてゐると、突から通信筒が
落下されました。

「下畑安三茶子騎兵十八聯隊」大行軍中が
数千、敵に包圍され苦戦中、聯隊ハ兵ニ

コレヲ救援
との中隊長殿の傳令、私達一同に、血湧き

肉躍りの感がありました。
命令一下、私達は夢中で馬腹を蹴りました。

人馬一体土煙を上げて宙をとびました。ニ
十キロも瞬時に駆け、素早く徒歩隊に移り

ました。敵に接近しようとして、桑畑を前進申
すぐ近くで、敵の機関銃が気狂の様に唸り出

しました。バラ／＼と桑が葉が足もとに舞
び落ちる。シュー／＼と身辺を掠める。

飛来つた一弾が、すぐ前の桑の葉をうた落
した。

「マッタク」と思つたとたん、私は気が
遠くなつた様にパツ／＼と倒れました。

0071

かけ寄った戦友が
 とけんしたか
 うん
 気がつて見れば、痛むところはない、鼻
 に手をやれば呼吸に異状はない、私は湧き
 上つてくる取しに顔のほてるのを覚えな
 かり、一散に敵に向つて躍進しました
 戦友の爆笑を気にしなから

分隊全員で馬の看護

騎六、中

騎兵軍曹 鳥田三四

南京攻畧のため部隊追及中、十二月三日

下細安に到着しました
 その時騎兵某が

「分隊長殿、京伯が瀉痛らしくあります」

と喜つて来ましたが、また南京迄相当の距離
 です。今迄元氣よく事故なく歩つて来たの
 に、一着と悔んでみておし、かたがありませ
 ん。現在地に宿營するに、とたして、早速看
 護をはじめました。

「獣医官殿は瀉腸をされます
 湯を沸せし」

と喜ばれますが、附近の家には釜等見当
 りませんので、飯盒で沸かしました。分隊

全員一生懸命で、一駄馬一頭罷れたら、小
 隊の戦斗力に影響すること甚大です。

「御苦勞だが頑張つてくれ」と言へば
 判つておます。自分達のため働いてくれ

た馬ですもの。若しもの身があつては
 中訳ありません。自分達の苦痛など、問

題ではありません。オイ京伯癒さんだ
 ぞ、もう少し我慢だ、すぐ良くなるぞ」

と答へてくれます。

腹をこする者 湯を沸す者 灌腸の手傳
かきする者 疲勞も空腹も忘れ 快復の
一刻も速かれと神に念じながら看護をつ
つげました

灌腸を終った獣医殿は

「結果は良好だ 今一息だ」と

と言はれる。それにより力を得て

「オイ京伯じつかり 今少しだ」と

ヨツサく の掛声で腹をこす。私は此

の状況を見て 何か胸にこみ上げて来て

一詣にやってくる手が 何時か間に止つ

てしまひます

小隊長殿が日頃言はれる 愛馬心の涵養

先づ馬と語り 苦樂は共にせよ

との言葉 正にそれか今実行される

あるのです

遂に皆の努力は報はらまひました

小隊長殿 草を食ひます 水も飲みま

す

と皆の声は喜びにふりへて居ます

時は正に午前一時 獣医殿も

「もう大丈夫だ 明日の行動には差支な

いよし

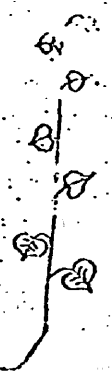
と言はれます

「あゝよがったく」と一同安堵の胸を

撫でおろしました 一時に空腹を感じまし

た 飯盒にかぶりつく様にして食ふ飯の美

味のこほ



重荷おろし 粟毛よ汝が汗ふかむ

みがかひもせむ 疲れたれども

この心あはれ知りて やわわが粟毛

疲れし肩にかほを寄するも